

## 長崎県感染症発生動向調査速報

平成25年第20週 平成25年5月13日（月）～平成25年5月19日（日）

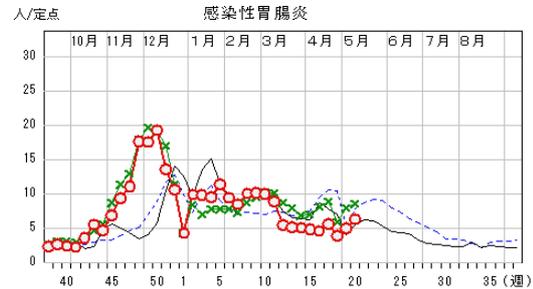
## ☆定点報告疾患（定点当たり報告数の上位3疾患）の発生状況

## (1) 感染性胃腸炎

第20週の報告数は279人で、前週より58人多く、定点当たりの報告数は6.34であった。

年齢別では、20歳以上（49人）、1歳（42人）、10～14歳（33人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、対馬保健所（12.50）、県南保健所（10.40）、県北保健所（7.67）が多かった。

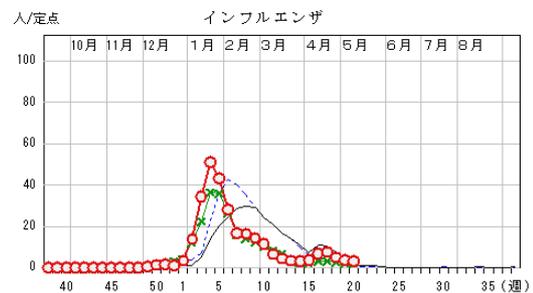


## (2) インフルエンザ

第20週の報告数は221人で、前週より31人少なく、定点当たりの報告数は3.16であった。

年齢別では、10～14歳（99人）、6歳（15人）、7歳（15人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、長崎市保健所（6.53）、西彼保健所（4.17）、県北保健所（3.50）が多かった。

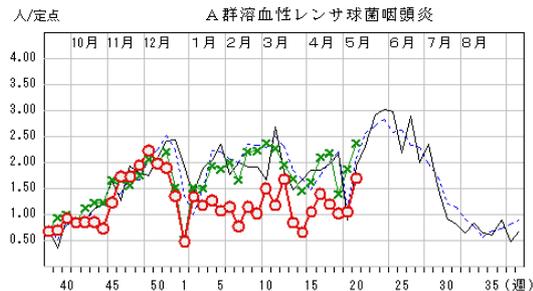


## (3) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

第20週の報告数は75人で、前週より29人多く、定点当たりの報告数は1.70であった。

年齢別では、4歳（15人）、5歳（14人）、6歳（10人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、県北保健所（7.67）、長崎市保健所（2.60）、県南保健所（2.00）が多かった。



○ 当年(長崎県)      — 前年(長崎県)  
× 当年(全国)      - - 前年(全国)

## ☆トピックス・季節情報

## 【感染性胃腸炎】

第20週の感染性胃腸炎の報告数は279人で前週より58人増加しましたが、定点当たりの人数（6.34）は全国定点当たりの人数（8.65）以下でした。対馬地区（12.50）、県南地区（10.40）は他の地域に比べ報告数が多いようです。全体的に終息に向っていましたが、先週より再び増加に転じていますので注意が必要です。

感染性胃腸炎は、細菌又はウイルスなどの病原微生物による嘔吐、下痢を主症状とする感染症です。年齢別に見ると、報告の多くは1～2歳の乳幼児が占めています。原因はロタウイルス、ノロウイルスをはじめとするカリシウイルス、エンテロウイルス、アデノウイルスなどのウイルス感染による場合が主流ですが、腸管出血性大腸菌などの細菌が原因となる場合もあります。

原因微生物のうち、ロタウイルスについてはすでにワクチンが認可されていますので、予防することが出来るウイルスです。特に、小さいお子さんがいらっしゃるご家庭では、保護者の方が手洗いの励行、体調管理や体調の変化に心掛けてあげるなどして感染防止に努め、早目に医療機関を受診させてあげるよう心がけましょう。

## 【インフルエンザ】

長崎県における第20週の報告数は221人で、前週より31人減少しましたが、定点当たりの人数（3.16）は全国定点当たりの人数（1.87）を上回りました。先週より注意報レベル「10」を超えている地域はありませんが集団発生も散見されますので油断禁物です。

新緑の季節となり、だんだんと夏に近づいておりますが、寒暖の変化が激しい日が時折ありますので、体調管理に気をつけ、外出からの帰宅時にはうがい、手洗いの励行、マスクなどによる「咳エチケット」の実践で積極的な感染防止に努めましょう。

罹患した際には有効な抗インフルエンザ薬がありますので、体調に異変を感じたら早めに受診しましょう。

【水痘】

長崎県における第20週の報告数は、前週より2人増加して70人でした。定点当たり的人数(1.59)は、全国定点当たり的人数(1.38)を上回りました。長崎地区(2.80)、上五島地区(2.50)、県南地区(2.20)は他の地域に比べ報告数が多いようです。

この疾病は、例年、冬場に患者数が増加する傾向にありますが、今後の動向に注視していく必要があります。

水痘は水疱瘡(みずぼうそう)とも呼ばれ、原因となる水痘帯状疱疹ウイルスは伝播力が強く、ウイルスを含む飛沫あるいは飛沫核を経気道的に吸入することによる飛沫感染あるいは水泡の内溶液と触れることによる接触感染により感染が成立します。手洗いの励行、体調管理に心がけ感染防止に努めましょう。

**☆トピックス：長崎県内で2例の重症熱性血小板減少症候群(SFTS)の発生が確認されました。**

◎今年、1月30日に、国内発生例としては初めてダニ媒介性のウイルス感染症「重症熱性血小板減少症候群(Severe Fever with Thrombocytopenia Syndrome: SFTS)」の山口県における患者発生および死亡例が報告されました。その後、各地から確認症例の報告が相次ぎ、長崎県でも平成17年(2005年)の症例2件が確認されました。

国内での患者報告を受けて、SFTSの発生を予防し、そのまん延の防止を図るため、平成25年2月22日付の法改正に基づき、平成25年3月4日から感染症法上の4類感染症に指定されました。

＜感染予防について＞

◎感染源とされているマダニは全国に分布しており、主に森林や草地のほか市街地周辺でも見られ、春から秋にかけて接触する機会が増えることから、感染予防が最も大切です。今のところ、有効な抗ウイルス剤やワクチンはありません。

◎行楽やハイキング、農作業など、ダニとの接触が多くなる季節となりますので、野外で活動する際は、長袖、長ズボン、長靴を着用するなどして肌の露出を極力避けて感染防止に心がけましょう。

もし、ダニに咬まれていたことに気づいた場合は、自分で無理に取ろうとせず、医療機関で取り除いてもらいましょう。

◎マダニに咬まれた後に発熱等の症状があった場合は、速やかに医療機関を受診しましょう。受診した医療機関では、咬まれた状況などをできるだけ詳細に説明しましょう。

◎多くの場合、SFTSウイルスを保有しているマダニに咬まれることにより感染するといわれていますので、インフルエンザのように人から人へ感染して広がるものでないとされています。

＜重症熱性血小板減少症候群(SFTS)について＞

(参考)厚生労働省ホームページ(重症熱性血小板減少症候群について)

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou19/sfts.html>

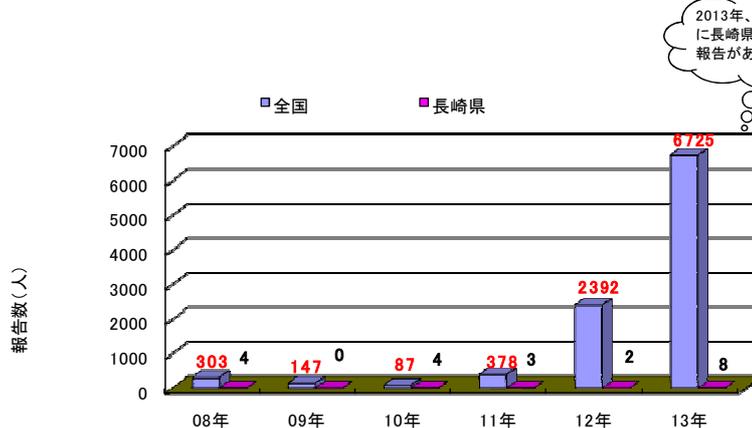
**☆トピックス：昨年に引き続き風しんが増加しています。**

昨年同様今年も風しんの患者数が増加し、「先天性風しん症候群」も5例(暫定値)報告されたことから、昨年5月、7月に続き、厚生労働省は平成25年1月にも3度目の注意喚起を実施しました。昨年の風しんの全国の累積数に比べ、今期の第19週までの累積値は6,725人と昨年の報告数の2.8倍にもものぼるため、注意が必要です。

風しんはせきやくしゃみなどの飛沫から感染し、通常は発疹や発熱が起きますが軽微な症状で経過し重篤化することはほとんどありません。しかしながら妊娠初期に感染すると、胎盤を経て胎児にも感染し、先天性の心疾患や難聴、白内障など(先天性風しん症候群: CRS)を引き起こす危険性がある恐ろしい感染症でもあります。

風しんやCRSは予防接種により予防可能ですが、妊婦へのワクチン接種は禁忌であるため、妊婦または妊娠する可能性の高い方に伝播させることのないよう、周囲の身近な人は医師と十分相談の上、抗体検査やワクチン接種を受けることが重要です。

**本県では今年に入ってから第19週までに、8件の報告がありました。今後の風しんの動向に注視して十分に注意しましょう。**



報告年(2008~2013年第19週まで)

全国と長崎県の風疹の報告数の推移

